

村助教授に囑し、茲に本書の上梓を見るに至つたのである。

春日神社文書と略同様の形式において本文七九六頁より成る「談山神社文書」の學術的價値の偉大なるは今更多言を要すまい。研究者の踏む大なる徒勞を省く此の事業の如何に困難であるかは、史料編纂掛のそれと思併せて大なる感謝を編者並びに刊行者に捧げなければならぬ。

内容は圖版二四、文書五三一を収載する。圖版日次の一部を示さば、神影、御破裂御平癒勅使參向圖、並びに祈願告文等は圖版と共に談山神社御破裂の國家的意義を理念し、あるものは郡山御遷座の軍事的意義を、或は織豊徳三氏の對社寺を窺ひ得られよう。又は後陽成天皇御宸筆後法興院政家記抄、神道長上日時勘文、狩野探幽自筆書狀、寶生太夫勝吉書狀、鶴殿關錢納日記、以下の比類稀なる史料を容易に利用し得られる。

而して卷末附録に作製收録せられたる人名、社寺名、地名、件名の諸索引は如何に學徒に多大の便を與へるであらう所藏文書總目錄と共にその周到なる用意は蓋し推

賞の辭を惜まないものである。

如此資料集の刊行が各大社、大寺、諸藩等に於て行はれるならば日本研究に如何に役立ち容易になるであらうか、吾人は今この書を手にしつゝ、その理想の實現の一日も早からん事を祈つてやまない。(菊版附録八一頁、價八圓、星野書店〔寺尾〕)

### ●日蓮聖人研究 第一卷

山川智應著

本書は日蓮聖人の信者であり研究者である著者が聖人に就いて研究した過去の業績を纏めて世に出だされたもので、明治四十二年より最近に至るまでの論說十三篇を含み、其の大部分は既に諸種の雜誌に掲載されたものである。その主たる内容は第一部史的研究、第一門史的考證、日蓮聖人の發心立願の時期を論ず、清澄寺宗旨の變遷と其の寺格位地を考ふ、叡山における日蓮聖人の師友の研究、平左衛門尉賴綱の父祖と其の位地權力及び信仰、第二門史的考察、「親鸞日蓮兩上人の對照」の批判、第二部文獻的研究、第一門眞蹟研究、「日蓮聖人御眞蹟」と其の「對照錄」、第二門遺文研究、「三大祕法抄」の眞偽問題、第

三部宗教的研究、第一門宗教學的考究、比較宗教の意圖より生ぜる宗教學の分科と宗教の五義、第四部人格的研究、第一門肉體的觀察、信憑するに足るべき日蓮聖人の畫像と木像（其一）第五部思想的研究、第一門批判的方面、日蓮聖人の研究態度としての三證具足、である。從來の多くの日蓮聖人傳が今日にあつては史的價値の乏しいものになつて居り、新たに學術的に調査し直さねばならぬのであるが、斯かる研究によつて聖人の事蹟が少しづつでも闡明になつてゆく事は宗界のためにも又一般學界のためにも喜ばしいことである。（菊判五二四頁、東京新潮社發行、價三・五圓）〔松野〕

◎天台教學史 島地 大等著

天台教學は支那に發達したる佛教各宗に對しては固より我國に發展した諸宗諸派に對しても多大の影響を及ぼしたもので、現存せる我國の佛教にして天台と關係を有しないものは殆んどないこと云つてよい。故に此の一家に對する教學發達の史的研究は、やがて佛教諸宗派に於ける教理史的研究とも見るこゝが出来来る。本書は故島地大

等氏が印度の龍樹以來支那日本に亘る天台教學の發達變遷を講述されたものを筆録したもので、その底本は明治の末年が若しくは大正初年のものゝ推定される由にて著者晩年の所説ではないが斯學に造詣深き著者が力を竭して研鑽されたものであつて宗學史上重きをなす述作と云へやう。第一編源流史概説には立祖相承論、龍樹の法門並に思想の發展、天台教判天台止觀禪法の系統、第二編成立史論には天台大師傳、天台智顛の著作、同教學、章安灌頂の結集、第一期暗黒時代、荆溪湛然の中興、唐朝佛教に與へたる天台教學の影響、第二期暗黒時代、第三編趙宋天台史には唐末五代の佛教大觀、趙宋天台復興の事情、學派の分系、慈光系、螺溪系の諸師、山家山外の論諍、四明以後の大勢、天台教學と趙宋佛教との交渉藕益の天台、第四編日本古代天台史には準備期の日本天台、傳教大師の立教開宗、初期の圓頓大戒、初期の天台圓宗、初期の台密諸師傳、圓仁の著作とその佛教觀、智證大師の密教、安然の密教、初期台密の事相と祈禱、初期の禪と念佛、良源の中興、山寺兩門分裂時代の教學、

事相盛興期の台密、慧檀兩流の大觀、慧檀諸師の著作、二箇相承の問題、日本天台の解釋法、機根の分類、教判上の特色、本迹二門の問題、止觀と法華との交渉、口傳法門の略説、日本天台の分裂問題、日本天台の墮落と寂山の頽廢、第五編には近世天台史概説を述べてある。尚ほ卷末には、止觀業遮那業の血脈並に索引を添へてある(四六版 五二〇頁、東京明治書院發行、價三・五圓)〔松野〕

● 江都督納言願文集

平泉 澄編著

才智過人、文章勝他、誠是天下明鏡也。中御門宗忠をして嘆ぜしめた平安朝後期の碩學大江匡房の願文集である。此書は本來六卷より成るものであるが、續群書類従卷第八百二十七に收められたる第三卷のみ世人の觸目し得る所であり、一代の文人の作る所の文章は、他に續本朝文粹朝野群載等に散見するのみであつた。

平泉博士が大正十五年秋塙檢校の群書類従に採録したる大永八年書寫の神皇正統記を水戸附近の六藏寺に求め赴き、三回討査して遂に求め得ず、而して意外なる古寫

本を見出した。即ち戰國の頓霞浦の一僻村の該寺に土籠ミ自稱し居たる學僧惠範の影しき著作、正嘉二年の性靈集、建治二年の續靈性集等。江都督納言願文集も亦この時の發見に係る。

六藏寺本江都督納言願文集は第四卷を缺くのみで、他五卷は之を完備し、然して永享七年の書寫により、學僧惠範の手澤本であり、又水戸義公の親閱を経たミ推せられてゐる。

刊行せられたる内容は、卷第一(帝皇に關するもの)に後三條院、五七日御願文を始めとして二十二篇、卷第二(仙院、后妃)は十八篇、卷第三(大臣、諸卿)に二十四篇、卷第五(女人、尼公)に二十三篇、卷第六(上客、庶人)に二十八篇、計百十五篇を數へ、右相府室家願文圓徳院の願文等寛治以前の傑作三十篇を存してゐる。

この刊行が集の缺文を補ひて、其名一世を蔽ひてしかも其作多く傳はらなかつた名儒大江匡房卿の文才を偲ぶにミまらず、その文が當時の名流の爲に草する所なるが故に歴史的色彩に富み、世俗的關係ミ共に宗教思想を